

おにぎり

中 三

私がまだ四歳だったとき、父親の転勤で、イギリスに行くことになりました。私は、外国に行つたことがなかったので不安でしたが、初めての外国なので楽しみでもありました。新しい友達はできるかな、英語は話せるようになるかな、毎日楽しく生活できるかな、と。

しかし、現実はそのなりに甘くありませんでした。まず、言葉が通じません。家族に父以外で英語を話せる人がいませんでしたし、イギリスに来てすぐに英語が話せるわけがないので、大変なことになります。言葉が通じないことは、こんなにつらいものかと思いました。

数週間後、英語に慣れるため、私は現地の学校に行くことになりました。そして、そこで「差別」という壁にぶつかりました。

「お前は肌の色が違うから嫌だ。」

「英語を話せないのかよ。」

「お前が持つてくる弁当、気持ち悪い。」

肌の色が違うせいで仲間はずれにされ、英語を話せなくてばかりにされました。言葉はわからなくても、差別されていることはわかります。言い返したいことはたくさんあったのですが、言い返せない日々が続きました。

しかし、一か月くらい過ぎると、以前より悪口が減っていきました。クラスメイトは、アジア系の肌の色に慣れたようで、また、私も頑張つて英語の勉強をしたので、少し楽に生活できるようになりました。

一方、食べ物への偏見からくる差別はまだ続きました。私がお弁当に持つていった「おにぎり」が原因でした。自分にとっては普通のおにぎりなのですが、イギリスの子供にとっては、見たことも食べたこともない、気持ち悪い食べ物に見えたようでした。米を食べたことがないうえに、真っ黒い海苔やひじきを食べる私は、気持ち悪い弁当を食べる日本人という目で見られ、嫌がられているようでした。母は、

「そのうち慣れてくるわよ。」

と言つて、おにぎりを作つてくれましたが、時々、サンドウィッチを頼んだこともありましたが、時々

そんなことが続いたある日、
「君のお弁当に入っている物、珍しいから、食べさせて。」

と、一番仲良くしていた子が声をかけてきました。私はびっくりしました。彼のおじいさんが日本好きだと後で聞きましたが、そのときは、好奇心と、それ以上に勇気のいる決断だったでしょう。

私は迷わず、彼にお弁当箱の中のおにぎりを分けてあげました。何て言われるか、食べてくれるか、どきどきしましたが、おにぎりを初めて一口食べた彼は、

「おいしい。もっと食べたい。」
と言ってくれたのです。

「本当に？おいしい？」
私が思わず聞き返すと、
「うん。」

と、にこにこして答えてくれました。味も自分もほめられた気がしました。二人で食べたおにぎりは、あつという間になくなり、

「もう、ないの？」
と言われるほど、本当に気に入ってくれたようでした。その時のうれしさ、一緒に食べたおにぎり

のおいしさは、今でもはっきりと覚えています。大げさかもしれませんが、自分という存在を認めてもらったような気持ちでした。

それから、私に対する差別は少なくなっていました。他にも、おにぎりを食べてみたいと言う子も増え、それまで嫌だったランチタイムが、友達との楽しい時間になりました。

世界には多くの民族がいて、生活習慣が違い、宗教による食文化の違いもあります。当然、異文化と出会ったときは、驚いたり、理解しにくかったりすることもあるはず。私も、逆の立場ならどうだったでしょう。年齢にかかわらず、偏見をもつことがあるかもしれません。今は、日本を訪れる外国人観光客や日本で働く外国人も増えています。お互いに偏見を持たずに、文化を尊重し合いながら、対等な立場で接点を見つけていくことが大切だと思います。また、相手とわかり合える言葉を身に付けることも必要だと、経験から学びました。

「おにぎり」のことを「おむすび」とも言います。私とイギリスの友達を結びつけてくれたのが「おにぎり」だったと思います。